

# 大隅和雄先生のご退任にあたって

勝 浦 令 子

大隅和雄先生は、1977年4月に文理学部史学科の教授に就任されて以来、24年間在職され、本年3月末をもって定年退職され、4月には名誉教授とられた。

先生は、1932年10月10日に福岡市で、九州帝国大学の鉱山学者大隅芳雄先生のご長男としてお生まれになった。外祖父には日本史学者の長沼賢海先生がおられる。1945年3月に国民学校を卒業された後、戦時中に全国の理系に秀いでた生徒を特別に集めた広島高等師範学校附属中学校特別科学教育学級に進まれた。しかし疎開中広島への原爆投下により校舎が壊滅したのに伴い、福岡県立中学修猷館に転校され、その後新制となった同高等学校を卒業された。そしてこの頃には日本史を志され、1951年に東京大学教養学部に入學、さらに文学部国史学科に進学、1955年に学部を卒業された。その後同大学院の博士課程を経て、1964年に北海道大学文学部史学科に助教授として赴任された。そして13年間お勤めになった後、1977年に東京女子大学に着任された。

先生のご専門は、学部の頃に日本中世史を専攻されて以来、中世のご研究が多いことは確かではあるが、先生の関心はこのような狭い時代区分に括られるものではなく、また学生の頃に日本文学協会に参加され、西郷信綱氏宅の読書会を今でも大切にされているように、常に歴史と文学を総合的に考え続けてこられた。そして洋の東西を問わぬ歴史・文学・思想・宗教に対する膨大な読書に裏付けられた学識と幅広い視野によって、古代から近現代にわたる日本思想史・日本文化史を研究されてこられた。

西行、無住の研究を出発点として、さらに『愚管抄』『神皇正統記』『平家物語』『太平記』『元亨釈書』などの史書を深く読み込み、その中にみえる遁世観、無常観、歴史観をはじめとし、日本人の思想・文化の特質について、問題の本質を鋭くついた洞察にみちたご研究を重ねておられる。これらをまとめた代表的な著書に、『聖宝 理源大師』（法蔵館 1976年）、『中世思想史への構想』（名著刊行会 1984年）、『愚管抄を読む』（平凡社 1986年）、『日本史のエクリチュール』（弘文堂 1987年）、『事典の語る日本の歴史』（そしえて 1988年）、『中世 歴史と文学のあいだ』（吉川弘文館 1993年）、『日本の文化をよみなおす』（吉川弘文館 1998年）などがある。中でも『愚管抄を読む』は現在では講談社学術文庫に選ばれ、長く読み継がれていくべき、名著のほまれ高いものである。また立正佼正会の教団史の研究と編纂に1977年から参加され、『立正佼正会史』の中で新宗教の教義の形成と展開の特質を考察され、各教区の信者からの聞き取り調査をふまえた教区史の執筆を分担された。この他に川崎庸之・井上光貞・石母田正・久米邦武・黒田俊雄など近現代の主要な歴史学者の著作集

の編集委員として活躍され、解説を執筆されている。

さらに大隅先生は後進の人についてそれぞれの能力や個性を引き出し、共同の研究活動に活かしていく指導力に優れておられ、先生が編著者となられた業績も多い。その中でも企画・編集に尽力された代表的なものとして、『シリーズ女性と仏教』全4巻（西口順子氏と共編、平凡社、1989年）がある。これは1984年から10年間続いた、研究会・日本の女性と仏教のサマーセミナーの活動の中で生まれたものであり、先生が若い頃参加された宗教史サマーセミナーを念頭に置き、若い研究者に日本人の信心の歴史を女性の問題を糸口に捉えなおそうと呼びかけられたもので、先生を慕って集まった若い日本史・仏教史・女性史・宗教史・日本文学の研究者がここから多く育っていった。また全国各地の古典芸能・仏事・神事の貴重なビデオ記録と論文による『大系日本・歴史と芸能』全14巻（網野善彦氏他と共編、日本ビクター・平凡社、1991年）は毎日出版文化賞特別賞を受賞されている。

先生は研究の場はもとより、様々な場でまとめ役を引受けてこられ、学内外でのご活躍も多い。学内では学生部副部長2期2年、学会委員長4年間、また文理学部長補佐1年、そして1989年からは文理学部長を2期4年間お勤めになり、1990年から評議員にも4期12年間という長い間選出されてこられた。そして図書館長・比較文化研究所所長も歴任された。これらは先生のバランスのとれたお仕事ぶりを多くの人々が頼りにし続けたことによる。さらに丸山眞男氏の蔵書が東京女子大学に寄贈され、丸山眞男文庫を設立していくにあたって、丸山家と学内の重要なパイプ役となられた。この他東京女子大学と東アジアの大学との交流にも力を注がれ、中国の雲南民族学院には学長代理として3度訪問され、また中国からの客員研究員の受入れや、韓国の誠信女子大学校との学生交流に協力を惜しまれなかった。

学外でも1963年に醍醐寺古文書・聖教調査団に参加されて以来、毎夏の調査を主導され、1992年からは醍醐寺文化財研究所所長を勤めておられる。また1994～96年まで日本思想史学会会長、この他1984年から磐梯町の史跡慧日寺跡調査・保存・整備指導委員会委員、1998年から大倉精神文化研究所所長と要職をお引受けになっておられる。

このように学内外にご多忙な大隅先生ではあるが、学生たちに講義することを何よりも大切にし、楽しみにされており、学内はもとより、全国の主要大学の非常勤講師や集中講義を引受けられ、また1988年に中国の北京日本学研究中心客員教授、93年に韓国の誠信女子大学校大学院非常勤講師、1998年にハンガリーのエオトヴェシ・ローランド大学客員教授など、海外でも教壇に立たれてこられた。

先生の記憶力の確かさは、余人の及びがたいものがあり、学問的なことはもとより、出会った全ての人に対しても詳細に記憶され、それぞれに温かい気配りをされて、言葉をかけてくださる。そしていつも学生に、歴史を考える上で大きな視点に立ち本質を見失わないことをやさしく指導されているお姿を拝見してきた。先生のご退任にあたり、永年のご指導に感謝しつつ、先生のご健康とご健筆を心から祈念したい。